

現場からしか見えない日本農業史・農学、そしてこれからの日本農業

重久正次

農業は自然生態系の中から人間にとって有益なものを得るために、他の動植物を排除して育成する作業を伴います。したがって農業は元来自然環境を破壊するものと考えています。

この考えから、古代から現代までを、農耕地拡大による環境破壊とそれにともなう雑草・病虫害との闘いとして農民の立場から概観するつもりでした（能力不足でうまくまとめられなかったと反省しています）。

現代では、農民と非農民との人口比がそれ以前から逆転し、それらの要求が農業を混乱させており、生態系保護・環境問題とあわせて農民を苦しませていると考えています。

最後に、発展途上国を中心にさらに増え続け、確実に増加する飢餓人口を少しでも減少させるための農業のあり方を夢想しました。

農薬や化学肥料の多用による反省から有機栽培などの志向が高まりつつありますが、東北大震災による津波被害と福島原発のメルトダウンなどで今までの科学技術に疑問を持たざるを得なくなっています。しかしながら、被害を受けた東北農業の復興に水耕栽培などの植物工場が多く取り入れられている事実は今後のわが国の農業のあり方として注目したいと思っています。

農業は、今後も急増する人口の命を維持するための農産物を供給するための英知を結集しなければなりません。工業的エネルギーを得るために耕地を使用する、というのは今後許されないことと思っています。最近の人口光合成の研究の成果は目覚ましいものがあり、バイオエネルギーはそのようなことを利用して工場生産するべきではないかと思っています。

環境や生物多様性を無視した農業は今後できなくなるでしょう。農産物を単なる貿易産物のひとつとしか見ない考え方や、プランテーション、モノカルチャーなども問題でしょう。

日本の農業は、伝統的にきわめて小さな区画の耕地で多様な農作物をモザイクのように栽培し、限られた面積からいかに収穫量を安定的に高めるかの工夫がされてきました。このような伝統的
日本農業は、環境、生物多様性を維持しながら生産性を高めるひとつとして評価すべきである
と思っています。

また、農産物を規格化された大型物流製品としてみるのではなく、各地の風土に合った多様な品種を見直し、個々の品種を日ごろの食生活に取り入れる工夫が消費者にも求めていくことで日本農業の安定化につながるのではないかと夢想しています。